

明治21年4月に東京で「神道直轄天理教会」が公認された。7月23日におぢばに教会本部が移転されるまでの3カ月間は役員が交替で東京の仮本部に詰めていたようで、増野正兵衛は5月24日から東京に出向している。その頃の「おさしづ」を見ていきたい。

- ・明治21年6月19日：東京に於て増野正兵衛詰合中身上障り、松村吉太郎も同様に付、兩人より願う時の増野正兵衛へのおさしづ／右同時、松村吉太郎居所及胸悪しきに付伺／押して、東京本部に於て参詣人に神一条の道を伝えても宜しきや、又本部にてするは差し支えなきや伺
- ・8月16日：増野正兵衛左の足指手首痛み、咽喉悪しく腹痺れ、左の肩咳出で障りに付伺
- ・8月29日：増野正兵衛咳、腹の痺れ伺
- ・11月20日（陰曆10月17日）：東京より前川菊太郎、増野正兵衛同道にて帰り願
- ・12月10日：春野千代出直に付、後治め方願
- ・12月12日：春野夫婦大阪へ引越し、母一人残り別に隠居致し、その方へ増野正兵衛一所に引越致しても宜しきや伺
- ・12月17日午後11時：増野正兵衛伺、(前伺の、母方へ一所になるおさしづの中に、「後一つたんのうであろう又談示せえ」と御聞かせ下され、又身上障りに付おさしづに「夜明けたらという事も聞いてある」と聞かし下され、これはこちらへ御引寄せ下さる事でありませう、又悟り違いにや伺)／同日、増野正兵衛一度神戸へ帰りまして、内々談示致しとう御座りますに付御暇願
- ・12月20日：増野正兵衛東京を止めおぢばへ帰る事の願

東京の仮本部には増野正兵衛の他に松村吉太郎もいたが、両者とも身上の障りとなり、明治21年6月19日に「おさしづ」を仰いだ。「神がいずみ、神一条いずみ、人が頼り多く、人運ぶ人気大き心を早く思案立て替え」とあり、おそらく人の多い東京で様々なことを見聞きするうちに、増野・松村兩人に神一条の思案が薄くなったのではないだろうか。「神一条これまで聞いたる話を、大きな心と立て替えて、心を治め居よ」と諭されている。

7月23日、教会本部がお屋敷に移転された。それに伴って8月5日に東京の本部は出張所となった。正兵衛は、11月末頃まで東京で勤めていたようである。そうした中、8月16日、正兵衛は「左の足指」「手首」の痛み、「咽喉」の悪い状態、「腹」の痺れ、咳による「左の肩」の障りについて神意を尋ねている。症状に対して一つひとつふれることはなく、「順々の道を来れば変わり来る」と諭されている。

それから2週間ほど経った8月29日、今度は「咳」「腹の痺れ」で伺っている。「皆々先ずへ代わりやへ」とあり、押して「今一時代わりで御座りますか」と尋ねると、「さあへ一時一つの理はなるまい。順々の道急ぐ。早くへ一つの理を治めにやなるまい。退屈してはならんへ」と諭された。すぐの交替ではなく、「退屈してはならん」とあることから、正兵衛の勤め方に対するお諭しと解される。

正兵衛はそれから3カ月ほど東京で勤めた。そして、11月

20日、前川菊太郎と共にいよいよ帰ってくることに、「おさしづ」を仰いだ。「一日の日もならんと思うた日もある。神一条の道はもう一段二段三段とは言わん」とあり、東京で勤めた正兵衛たちを労<sup>ねぎら</sup>っておられるように思われる。それから9日後の11月29日には、おぢばにて教会本部の開筵式が執り行われた。

さて、東京から戻った正兵衛に、義姉・春野千代の出直しというふしが起きた。12月10日にその後の治め方について伺っている。「めんへ理を定めやるがよかろう。これで理である。それで十分さしづ取り扱い、これで成程、めんへ運んでやるがよい」と諭され、この出直しを契機として、おぢば移転について心を定めることを促されていることが読み取れる。

2日後の12月12日、「春野夫婦大阪へ引越し、母一人残り別に隠居致し、その方へ増野正兵衛一所に引越致しても宜しきや」と伺っている。「春野夫婦」とは、春野利三郎(妻いとどの兄)と千代のことであろう。千代が出直してしまったので、利三郎が大阪へ引越し、その代わりに正兵衛夫婦が母・春野ゆうと神戸で暮らすことについて尋ねたと考えられる。「互いに一つ理、心重々たんのう、いかなる処、一つ談示してくれるよう」と、それぞれが「たんのう」できるように談じ合うことを諭されている。

その後、同じ日に、正兵衛は自身の身上(「居所悪しく」「目の痒み」「寒気」「咳」「腰重く)について神意を尋ねている。「一度世界十分、神一条一段二段、世界一つ通りては、なれどもどんな者でも、いづれへ一つの理に寄せて了う。こちらが妨害、あちらが邪魔になる処は、皆神が引払うて了う」と厳しい言葉で、「一つの理に寄せて了う(ぢばへの移転)ことを諭されている。「又身上の処、内々一つ大抵思う道が、夜明け一つ来るならんという事が聞かしてある」とも述べられている。

正兵衛は、この日の二つの「おさしづ」について思案を重ねたことであろう。それから5日後の12月17日、改めて神意を尋ねている。正兵衛は、母の件に関して「後一つたんのうであろう又談示せえ」と言われたことと、自身の身の障りについて「夜明けたらという事も聞いてある」と言われたことに関して、「これはこちらへ御引寄せ下さる事でありませう、又悟り違いにや」と伺っている。「仕切つてどう、内々あちらこちらどうしよう。一つ理を定めて、又こうして後にこう、一つ理も治まる」と、心を定めて通れば治まってくることを伝えられつつも、「どうこうせいとは言わん」と、具体的なことに関しては正兵衛たちに一任されている。その上で「さあこれまで尽したこのう、落そうにも落されん、捨ようにも捨られん。一つ治むるなら一つ理も治まる」と、正兵衛への労いとも取れるようなお言葉を下さった。そこで、正兵衛から「一度神戸へ帰りまして、内々談示致しとう御座ります」とお暇を願うと、「何事も身に掛かる。神一条心に掛からんのが道と言う」と神一条の道について諭されている。その後、12月20日、東京出張を取りやめて、おぢばに帰る事を伺うと「さあへ古き処の話、聞いた処の道は、たゞ一段二段、さあへもうこれから先の道は、危なき怖きは無い程に」と諭されている。「たゞ一段二段」とは、かんろだいの石普請のふしを示唆されていると思われる。